

解答

一 1 エ 2 イ 3 エ 4 ウ 5 ア
二 1 イ 2 イ 3 エ 4 エ 5 ア
三 1 エ 2 イ 3 エ 4 エ 5 ア

足の裏に残る、土の記憶と共にある詩の朗読会の記憶が消されてしまうという気持ち。

問一 イウ
問二 イ
問三 エ
問四 エイ
問五 エア
問六 エ
問七 エ
問八 エ
大敵
一生

それぞれで逃げることを教えた「津波てんでんこ」という言葉は、生き延びた人が抱える、周囲の人を救えなかつたという苦しみを救済するものになりうるということ。
ウ

解説

二 間六
——線6の前に「外灯っていうのはね、自分のためにつけるんじゃない、他人のために点すんだよ。」ここにひどがいる、生きているという合図なんだよ。」とあります。ミナコは「詩の言葉も、外灯なのかも知れない。ここにいるよ、ここに詩があるよ。」と思つて、いることから、朗読会は、自分の存在を知らせ、相手の存在を認める場であると考えて、いることが読み取れるので、選択肢エが選べます。

問八
——線8の前にあるミナコとニシムラの様子に着目します。お互いになんとなく話し足りないと感じていても、どこにも場所がなく、よいお年を、なんていう都合のいい言葉を使えず、心を残して気持ちの整理がつかないという内容から、選択肢エが最も適当であることがわかります。

三 間三

本文中盤にある「田老の防潮堤が」で始まる段落で述べていることは、選択肢イと同じ内容を言い表しています。また、三段落目にあら「経済力やテクノロジー」、「痛いほどに思い知らされました。」の部分から選択肢エが選べます。

六 間六
本文の後半に、明治二十九年の大津波の反省から「津波てんでんこ」という言葉が語り継がれるようになります。また、三段落目にあら「経済力やテクノロジー」、「痛いほどに思い知らされました。」の部分から選択肢エが選べます。